

博士論文審査要旨

論文審査担当者

主査 明星大学 教授 竹内 康二

委員 明星大学 准教授 藤井 靖

委員 明星大学 准教授 丹野 貴行

委員 兵庫教育大学 教授 井澤 信三

申請者氏名 小笠原 忍

論文題目

ASD 児の行動獲得を促す弁別学習型ビデオプロンプトの効果に関する実証的事例研究－学習原理に基づいたビデオベース介入技法の精緻化－

(論文審査の結果の内容)

研究構成

本研究論文は総説としての序論、事例的研究を記載した本論、考察としての結論と、三部により構成されている。総論では本研究のテーマである自閉スペクトラム症(以下、ASD)児へのビデオベース介入に直接関連する領域の研究小史をまとめた。そして、ビデオベース介入に統一された定義や方法がないことを踏まえて、先行の展望論文を参考に独自のキーワードでビデオベース介入を体系的に整理した。その上で、弁別学習型ビデオプロンプト(以下、弁別学習型VP)についての実証研究が必要であることを指摘している。事例的研究では著者自身によって計画された研究をもとに、研究1～4までを詳細にまとめている。

研究1では、中度知的障害のあるASD 児2名を対象に弁別学習型VPの効果を検討することを目的とした。また、弁別学習型VP の効果によって、社会的スキル「大丈夫？」の獲得と般化が促されるか否かについても検討した。

研究2 では、ASD 児1 名を対象にビデオモデリング(以下、VM)を実施後に続けて弁別学習型VPを導入するビデオベース介入の適用可能性について検討することを目的とした。また、ビデオベース介入の効果によって、自分の体を洗うスキル(以下、入浴スキル)の獲得と家庭場面への般化がみられるか否かについても検討した。

研究3 では、ASD 児3 名を対象にビデオフィードバック(VF)を実施後に続けて弁別学習型VPを導入するビデオベース介入の適用可能性について検討することを目的とした。また、ビデオベース介入の効果によって、ゲームに負けた際に生じる不適応行動の減少と社会的スキル「負けの対処」の獲得が促されるか

否かについても検討した。

研究4 では、ASD 児5 名を対象にVMを実施後に続けて弁別学習型VP を導入するビデオベース介入の適用可能性について検討することを目的とした。また、ビデオベース介入の効果によって、挨拶スキル「こんにちは」の獲得が促されるか否かについて検討することに加え、VMのビデオ映像の内容を説明することを求める言語化課題を実施し、VM の効果と言語化の関連について検討した。

研究1から研究4の事例研究の結果から、弁別学習型VPの有効性を示すことができた。特に、研究2 から研究4 では、モデルの観察学習を基盤としたVBI (VMやVF) では十分な効果が示されなかった事例に対して、続けて弁別学習型VP を導入することによって、十分な効果を得ることができた。

結論では、4つの研究で得られた知見を総括した上で、対象者のスキルに応じたビデオベース介入の選択モデルを作成・提案した。このモデルは、複雑に手続きが分岐するビデオベース介入を発達支援の現場で活用するためのアルゴリズムを図示したものであり、このモデルに従うことで児童の能力に応じたビデオベース介入の手法を選択することが可能になる。

評価できる点

本研究は、ASD児へのビデオベース介入を学習原理の観点から体系化し、これまでに研究されなかった弁別学習型ビデオプロンプトを開発して効果を検証し、体系化を補完することを試みた。このテーマを検討することには行動科学のおよび社会科学にも学術的意義が認められる。また、序論部ではこのテーマに関する国内外の先行研究について十分な調査や情報収集が行われ、かつその整理と分析が十分に行われ、適切な研究課題が設定されていた。

設定された研究課題を検討するための研究の方法は慎重に計画された上で適切に実施されており、得られたデータの取り扱いや統計などによる分析結果の解釈は正確かつ緻密に行われていた。また、データの分析から結果の解釈、そして考察に至る論理展開には整合性・一貫性があり、結論が明確に導き出されていた。

本研究の価値や独自性は、ASD児の特徴を踏まえた上で、訓練効果が般化する可能性が高い学習方略を開発し、これらを個別の事例に合わせて検討した点にある。多くの先行研究が、ビデオの提示だけで効果がなかった場合にプロンプトを追加して行動形成したのに対して、本研究ではむしろ不要な刺激を削除することで、ASD児の刺激依存や刺激過剰選択性に陥ることを避け、般化を促した点に発想の転換がある。こうした転換のアイデアを実証的な事例研究にまで昇華させた点に大きな独自性がある。また、本研究が取り扱った動画を用いた介入方法は、オンラインでの教育や療育がますます盛んになる社会状況の中で、心理学のみならず教育学や福祉学の領域において大変重要なテーマであり、本研究の知見がそうした分野の発展に貢献すると思われる。

課題であった点

多くの研究は、シングルケースデザインによる事例研究のため、事例を積み重ねた上でのメタ分析をまたなければ一般的な再現性を示すことが難しい。また、シングルケースデザインとして3人以上の参加児によるデータが推奨されるが、臨床研究の限界もあり、一部の研究ではこの条件を満たすことはできなかった。また、現場での導入を意識した研究であるものの、社会的実装に關しての社会的妥当性の検討は十分とは言えず、今後の課題となっている。

しかし、上記のような課題について申請者は十分理解し、既にそれらを解決するための追加研究も実施中であること、そして限られた期間の中で実施した一連の研究であることを考慮すれば申請者の努力は高く評価できるため、研究の価値を損なうものではない。

よって、本研究は博士（心理学）の学位を授与するに十分価値あるものと認める。

（試験および試問の結果の要旨）

口頭試問においては、主に以下の点について論文審査担当者から質問や指摘があった。①グラフ化されたデータの一部において、解釈方法によっては介入効果があったとは言えない可能性のあるものもあった。②ビデオベース介入に適した標的行動の選定は重要な手続きであるが、その選定の手続きにはガイドラインがなく追試による再現性に影響を与える。③現場での実装を目指すには、動画の作成や取り扱いに必要なスキルをどのように教えるのか検討しなければならない。

こうした質問に対する申請者の回答は的確かつ丁寧なもので、論文審査担当者の質問内容や質問意図を十分に理解して本研究の課題を整理できていることが伺えた。また、今後の課題として上記の必要性について発展的に検討し、追加の研究を行っていく予定であるとの回答もあった。

以上を踏まえ、慎重に審査した結果、合格と判定した。